

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#007(高橋)(2022/06/01 uploaded)

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#007(高橋)(10:01)
(2022/06/01 uploaded)

<https://www.youtube.com/watch?v=0FKCxZwohPU>



**Research
Announcements**
#007

共同体概念に見るヌーソロジー的視点

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer **高橋 暢雄**

共同体概念に見るヌーソロジー的視点

高橋 暢雄

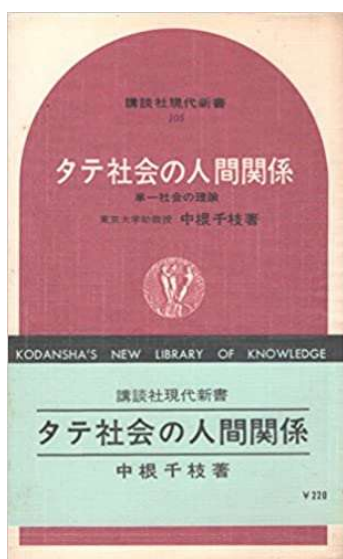
こんにちは、武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所の高橋です。今回の発表につきましては「共同体概念に見るヌーソロジー的視点」と題しまして発表させて頂きたいと思っております。

過去動画でも発表させて頂きました通り、ニューソロジーというものは、4次元的な視点で3次元に影響を受けずに見る、こちらが外面的なイメージ、一方では社会として共有され得るものとして、イメージの世界で頭を働かせていく、もしくは、自分のただの考えみたいな部分でやっていくものを、内面等々言うわけですが、まあ正確な表現ではなくて恐縮ですけども、これらが“nation”と“state”という国家レベルでは、どのような機能を果たしたのかという発表させて頂きましたが、共同体概念としていかなものかということを通じて発表させて頂きたいと考えております。

共同体という概念は、いわゆるコミュニティですので、国家というレベルでももちろん存在します。全人類というレベルでも発生します。もしくは、ローカルなレベルでも発生します。共同体というものっていうものは、その規模の大小、意味合いの大小に問わず、人々が集って同じ目的で結束をするというようなものになります。で、遙か昔ですが、テンニエスという社会学者がゲマインシャフトとゲゼルシャフトという分類を行いまして、非常にこれが現代でも有名な概念になっております。ゲマインシャフトというのはいわゆる共同体組織、ゲゼルシャフトというの機能体組織を指します。つまり、ゲマインシャフトというのは場の知り合いであるとか気が合うであるとか、そういうようなまさに共同体としてその場で一緒に動いていかなければならないというような側面の強い共同体を指します。一方、ゲゼルシャフトというの、産業革命以降の産業化によって発生したもので、目的に応じてそれぞれが役割を果たすという集団としての共同体の組織を表しています。ですので、ゲゼルシャフトにはゲマインシャフト以上に目的が必要になり、ゲマインシャフトにはゲゼルシャフト以上に霊体が必要になります。ですから、この2つは、共同体という括りでおきましても、意味内容とかそういうものが違って来るわけです。他方において、分類というものも非常に曖昧なものも、中にはあるということも、ご理解頂けるんじゃないかと思えます。ですから、例えば、宗教としての共同体はどうなのか、言語としての共同体はどうなのか、あと例えばコナベーション(conurbation)とかそういう言葉がありますが、自然発生的にエリアが広がっていく、例えば東京が栄えているから首都圏というエリアが広がっていくとか、このような広がりがあったりもしますので、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトというのが明確に分類のために用いられたものではなく、概念として違いを明確化するために行われた分類であることもご理解頂ければと思います。ちなみに「ゲノッセンシャフト」というものをギールケという人も言ってるんですが、職能や概念で結びつくものは、ゲマインシャフトともゲゼルシャフトとも言えないじゃないか。つまり、アリア人とか、ユダヤ人(まあ、ユダヤ人だったら宗教ですが)とか、アリア人のようなコンセプト、そういうような、イデオロギーもそれに近いですね。これはゲマインシャフト、ゲゼルシャフトでは括りにくくはないか。そこで、ゲノッセンシャフトという言葉もあるんですが、いずれにしても、明確に境界線のあるものではありませんので、それによっていろいろなパターンがあるわけです。

翻って日本におきましては、1967年に中根千枝さんが『タテ社会の人間関係』という本を書きまして、これが大変古典的名著と言われているわけですけども、日本におきましては、どちらかと言うと、第二次対戦後に産業がいきなり復興した形に範疇化できると。これによって、ゲゼルシャフトに

ゲメインシャフト的な考え方が入っているという中根さんの分析が、非常に人々の共感を得たわけです。日本型社会主義って言ったり、イデオロギー的な社会主義ではないのに、むしろ社会主義的な機能が低いと。戦後の日本はですね。ですから、会社に一生忠誠を誓うであるか、年功序列の給料に会社側もしたり、定年までは勤め上げて下さいとか、愛社精神がお前になんだとか、そういうようなものというのを、中根さんが「場の友人」であるとかいろんな表現で、その『タテ社会の人間関係』というふうにまとめられたわけですが、1967年ですので、相当昔であります、いわゆる、戦後の経済成長期の日本は、まさにゲゼルシャフトを中心にしながら、精神的な意味合いとしては完全なゲメインシャフトで行っているということです。



ヌーソロジー・サロンにおきましても、半田さんがヌーソロジーにおけるいろいろな概念の未来予想図のようなもので、ゲメインシャフトとゲゼルシャフトを用いまして、これの両立ができるじゃないかと。またその両立もこれだけデバイスが進化し、そして、ヌーソロジーのようなもので、人々の意識が本当の意味で高いレベルで共有化されていく可能性が出て来たら、ゲメインシャフトというものはローカルになり、ゲゼルシャフトはデバイスの進化によって広く薄くゲメインシャフトを生かすために使えるじゃないかというような形の問題を提起しておられました。非常に私もそれに感銘を受けさせて頂いたわけですが、このようにゲメインシャフト、ゲゼルシャフトというのはコンセプショナルな分類に何が文例になりますので、状態をいろいろ混合しているものもあれば、いやいや第3のやり方もあるじゃないかと、そういうものもあるわけです。翻ってヌーソロジーにおきましては、そのようなものではなく、空間の認識ですので、こことここが混ざっているというカタチはありません。しかしながら、ヌーソロジーにおける外面的なコンセプト、そして、内面的なコンセプト、これは正直申し上げて、局面によってどちらにおいても、ゲメインシャフト的な部分があったり、ゲゼルシャフト的な部分があります。しかしながら、ヌーソロジーの理解を深めていくためには、このような周辺的な知識があることによって、ヌーソロジー理解のときの混乱を防いだり、もしくは、ヌーソロジーの理解が進

んだとしても、非常にそこに対して変な社会的な、もしくは、自分の欲や自分の都合のようなものを入れずに、透徹にそれを理解していくということが可能になるのではないかと私は感じています。

したがって、今回の「共同体概念に見るヌーソロジー的視点」としては、直接的な関係は薄いものの、このようなコンセプトを理解して頂きながら、ヌーソロジーを見ることによって、ふっとヌーソロジーが実感に落とし込みやすくなるのではないかというふうに、私自身感じて、発表とさせて頂きたいと思います。今回の発表は以上です。また、次の発表でお会いできたらと考えております。どうもありがとうございました。(9:46/10:01)(了)

**Research
Announcements**
#007

共同体概念に見るヌーソロジー的視点

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 高橋 暢雄

(出典:【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#007(高橋)
(2022/06/01 uploaded)

<https://www.youtube.com/watch?v=0FKCxZwohPU>